

# 探 検 と 文 化 人 類 学

## (Cultural Anthropology)

横 田 健 一

戦後における探検ブームは目ざましいものがある。その探検目的は二つに大別されよう。一つは全然前人未踏の地域、山岳等を踏破しようとするもので、マナスル、チヨゴリザの登攀などがそれである。これは探検のための探検といつてよい。今一つは必ずしも前人未踏の地域ではなくてもよいが、学術的に未調査の地域を科学的に調査し、学界に新たな寄与をしようとする学術探検で、京大のカラコラム、ヒンズークシ探検や川喜田二郎君らのネパール探検、また諸国の数年にわたる南極地磁気観測等までもそれにふくめることができる。

学術調査の部門は多くは生物学、形質人類学、地質鉱物学、地形学、気象学等の自然科学部門が多いが、人文、社会科学では民族学、言語学、人文地理学、考古学、社会学、宗教学、史学等の部門がある。ここにのべる文化人類学こそは、実に今あげた人文、社会科学諸部門を総合した科学だといつてよい。人類学は人間についての総合科学で、文化人類学は人間の創造物一切を取り扱うのである。

もともと探検を要する未調査地域は文明社会を遠くはなれた未開民族社会であることが多い。文化人類学の中核をなす民族学(Ethnology)は、もと未開民族社会とその文化を研究対象として出発した。一方文明民族の中に残る伝承文化、旧慣を研究する学問を民俗学(Folklore)という。

民族学はヨーロッパ人がルネサンス以来、アメリカ、アジア、アフリカ、オセアニア等に進出し、自分達と異なる民族文化を珍しく思い、その意味を研究するところからはじまつた。先進のヨーロッパに比し、これらは後進未開であるところから、民族学文化人類学といえは未開民族を対象とするかのような観を呈しているが、本来の性格は文明民族を研究してもさしつかえない

学問である。

文化人類学の語はアメリカで好んで用いられ、イギリスは社会組織の研究が盛んなため、社会人類学 (Social Anthropology) を好んでとなえ、ドイツは Ethnologie の他に、Völkerkunde の語を使用する。フランスは社会学の一部門として研究している。

19世紀の後半まで学者たちは自ら探検に出かけず、未開地域におもむき旅行した宣教師、軍人、船員、商人等の手記、報告等をよんで比較研究する方法をとるものが多かつた。そうした成果の偉大な例をあげると、イギリスの Sir James George Frazer の "Golden Bough" 13巻やフランスの Emile Durkheim "Form elementaire de la vie religieuse" 等をあげ得るであろう。

このように自ら調査に行かず書齋で研究する人類学者を、後世の field worker たちは、armchair anthropologist と呼んだ。19世紀の末ないし20世紀の始ごろから学者たちは書齋を飛出し、未開地域に出かけ調査をはじめようになつた。

しかしはじめは短期間の旅行で未開民族の文化を瞥見するにすぎず、珍しい習俗のみをとり出して記録し、その文化の意味、その伝播経路や分布、ないし歴史的発展過程を推測する研究を行つていた。その文化要素が社会全体の構造とどう連関するかを深く注意しなかつた。

ところが1920年代にいたり、2人の画期的研究者があらわれた。1人はポーランド人マリノウスキー (Bronislaw Malinowski)、1人はイギリス人ラドクリフ・ブラウン (A.R. Radcliff-Brown) である。前者はメラネシアのトロブリアンド諸島、後者はインド洋のアンダマン諸島の原住民社会を研究したが、その方法上の特色は、数年もの長期間、原住民のなかに住みついて詳細に社会、文化各部門の各機能の相互連関を観察し、構造ファンクショナルイズム的に把握しようとした点にある。この方法を機能主義 (functionalism) という。

現在の研究はみなその影響をうけ、アメリカ諸大学の人類学科では、大学院在学の5か年中1か年おおむね (最後2年) は必ず異民族の中へ入り、そこに居住し、研究して学位論文を書かねばならない。

最近西ニューギニアで人類学研究中消息を絶つたアメリカ、ニューヨーク州知事ロックフエラー氏の令息マイケル君は、この大学卒業前の論文作製の為に探検していたと思われる。

しかし探検の対象は必ずしも未開後進地域の民族社会に限られるものではない。文明社会の文化にも未だ人々の気のつかない意味をもつ文化が多く存在する。この意味の再発見は是非やらねばならない。

一昨年あいついで出版された梅棹忠夫君の「日本探検」（中央公論社）、川喜田二郎君の「日本文化探検」（講談社）、はその好例であり、両君が外国の異民族文明を観察した眼で、日本文化を見直し、あのようにすばらしい再発見をしたのである。こうした研究態度は諸君に是非学んで頂きたいものである。

(1962.1.26)

## オロロンの島

宮 沢 典 男

留萌海岸の東の海上に、ゴマ粒のような島が二つある。海岸に近い方が焼尻島<sup>やぎしり</sup>、遠い方が天売島<sup>てうり</sup>。かつてはニシンの干石場所として知られ、それぞれ島一つで村をつくっていた。ニシンがとれなくなつていまでは両島とも羽幌町<sup>はぼろ</sup>の大字焼尻、大字天売となつてしまつた。ことに天売の疲弊ぶりはひどい。我々関西大学探検部はこの両島を調査したのであつた。特に天売島について話をしましよ。両島通いの船は<sup>とままえ</sup>苦前から出る。船名は天羽丸。新造船だ。鋼鉄船で75トン、10ノット出る。それでも冬期は海が荒れると、3日、4日とぶつ続けで欠航する。夏がこの船のかせぎ時だ。港の待合室に両島の看板広告が出ている。天羽丸の定員は二等一等合せて43人。運賃は一等が370円。二等は240円。港を出て天売につくのは2時間30分程かかる。テウリとはアイヌ語で「アシノウラ」と云う意味で島の形が似ているところから名づけられたといわ